

「シカの被害対策を考えるシンポジウム」 報告書



1 趣旨

東山部で課題となっている鹿への対策における住民への啓発活動として、標記シンポジウムを里山辺地区で開催したことを報告するものです。

2 開催概要

- (1) 日 時 令和7年12月14日（日） 午後1時30分から16時
- (2) 場 所 松本市教育文化センター 3F 視聴覚ホール
- (3) 主 催 里山辺地区まちづくり協議会、松本市農業技術者連絡協議会  
（松本市は共催で支援）
- (4) 参加人数 123名
- (5) 開催内容 第1部 農政課現状説明、基調講演、  
第2部 パネルディスカッション

3 内 容

<第一部 松本市発表、 基調講演>

(1) 松本市のシカ対策の現状について

松本市産業振興部農政課 丸山行康 課長  
松本市のシカの分布や捕獲数、農業被害、市の対策等について、資料を元に説明がありました。



(2) 基調講演「農業だけじゃない！～シカがもたらすリスクと私たちの備え～」  
株式会社ういるこ 代表取締役 山本麻希 様



ア 長野県のシカの歴史

(ア) 日本人と野生鳥獣の歴史的変遷

日本では3万年もの長い間、野生動物と共存してきた歴史を持つ。しかし、近世以降の社会変化により野生動物の個体数は大きく変動した。

(イ) 時代別の変化

江戸時代：大型野生動物の絶滅はなく、しし垣・しし番により動物との共存を図った

明治時代：安価な銃の普及により乱獲が発生

昭和時代：野生動物が激減し、18種以上が絶滅、多数の絶滅危惧種が発生

平成時代：里山の高齢化・過疎化により、野生動物が再び人間の前に現れるようになった。

(ウ) 里山環境の変化とシカへの影響

・ 過去の里山

エネルギー資源に乏しい日本では里山の木々が燃料として利用された。たたら製鉄等で大量の木を使用し、里山の木は過剰に伐採されていた。江戸時代の浮世絵に描かれたはげ山は実際の姿であった。

・ 拡大造林政策の影響

1960年代以降、全国の広葉樹林を伐採しスギ・ヒノキの人工林を植林。スギ・ヒノキの稚樹の芽は栄養価が高く、シカの爆発的な個体数増加を招いた。その後、スギ・ヒノキの成長に伴い利用可能な餌が減少し、多くのシカが大量餓死。

生き残ったシカはさらに標高の高い山に生息エリアを拡大した。

高山の下層植生の衰退と土壌流出等の問題が発生。

シカの生息域分布はH15年からH30年にかけておよそ5割から9割まで増加。

イ シカの生態と被害

(ア) ニホンジカの基本的特徴

・ 身体的特徴

鯨偶蹄目に属し、主蹄と副蹄を持つ。

足跡は縦に長い楕円形で、副蹄の跡が見つからないのが特徴。

- ・ 活動特性  
活動時間：早朝と夕方が最も活発  
胃の数：4つ（反芻動物）  
移動能力：高いジャンプ力を持つが、雪は苦手で冬季は雪のない場所に移動
- ・ 繁殖  
秋に交尾し、オスはハーレムの群れを形成  
雌の妊娠率は97%と高い  
年間増加率は約20%
- ・ 食性の特徴  
一部の有毒植物を除き、1,000種を超える植物を採食可能  
植物の葉、芽、樹皮、落ち葉を食べる  
植物があればどんな場所でも生息可能

#### (イ) 生息密度と被害の関係

- ・ 長野県内の生息密度  
松本市東部（ハケ岳ユニット）：28.12頭/km<sup>2</sup>  
（※山辺想定密度：300～350頭/km<sup>2</sup>）  
生息密度が高くなると植生破壊や表土流出を招く
- ・ 被害の実態  
森林被害：稀少植物の絶滅、お花畑の消失、スギの剥皮、裸地化  
農林業被害：長野県では動物別被害額の大部分を占める  
生活被害：アーバンディア問題（市街地出没）、交通事故の増加  
健康被害：マダニ媒介感染症（SFTS、日本紅斑熱）のリスク増大

### ウ シカの被害対策

#### (ア) 野生動物被害対策の3本柱

被害対策は相互に結びついた3つのアプローチで構成される

- ・ 防護対策（侵入を防ぐ）  
電気柵などによる農作物の直接的防除  
心理柵と物理柵の使い分け
- ・ 個体数管理（動物の管理）  
捕獲、駆除により野生動物の数を管理する直接的防除
- ・ 環境管理（環境改善）  
放任果樹の除去、緩衝帯整備等による間接的防除

#### (イ) 防護柵の設置と管理

- ・ 防護柵の種類  
心理柵（電気柵）：「触れると痛い」と学習させて侵入を防ぐ  
物理柵：強度で侵入を防ぐ頑丈な防壁・目隠し効果
- ・ 管理の重要性  
「設置しておしまい」は絶対にダメ  
定期的な点検・修繕が必要  
雨風やツル草により早期劣化する  
適切な管理により植生回復効果が期待できる

#### (ウ) 個体数管理について

- ・ 捕獲

捕獲の成功＝ハード（道具の質）×ソフト（技術）

箱罠：あまり技量は必要ないが、うまくするには時間とお金が必要

くくり罠：ちゃんと習えば短期で上達可能

銃猟：生息密度管理や積雪時の捕獲に有効

- ・ 捕獲の重要原則

失敗は禁物：一度罠の危険性を学習した動物はほとんど捕獲できない

捕獲失敗後の再捕獲率は約 3.9%と極めて低い

- ・ 生息密度管理の流れ

生息密度指標を調査（センサーカメラ等を活用）

捕獲目標数の決定（シカなら 20%以上）

エリアごとに目標数を捕獲

捕獲実施後に再度生息密度調査を実施

PDCA サイクルによる効果検証

- ・ 長野県の目標

1 km<sup>2</sup>当たり 30 頭のシカを約 10 分の 1（3 頭/km<sup>2</sup>以下）まで減らす必要。

（山辺地区は推定 300 頭～350 頭/km<sup>2</sup>のため 100 分の 1 まで減らす必要がある）。

高い技術の捕獲者による確実な捕獲が重要

#### エ 今後の課題と展望

シカは年間 20%増加するため個体数管理が極めて重要。現在の日本にはオオカミがおらず、シカを狩るのは人間のみとなっている。シカはなわばりを持たないため異常な高密度状態となり、被害は農林業にとどまらず交通事故や生活環境への影響も深刻化している。山際の住民だけでなく市街地の住民も含め地域全体で「自分ごと」として捉え、継続的な対策に取り組む必要がある。

#### オ 参加者からの質問

##### (ア) 質問 1：個体数管理が最も重要な対策であると考えて

→ シカは学習能力が高く、捕獲失敗した個体は二度と捕まらない。数を減らすだけでなく、専門技術を持つハンターが確実に仕留める技術が重要。中途半端な捕獲は逆効果となる。

##### (イ) 質問 2：オオカミの導入による対策について

→ 日本古来のオオカミと海外種は異なる動物で生態系への影響が不明。管理体制も不十分で、クマ問題も深刻化している現状では現実的ではない。

##### (イ) 質問 3：ハンターの高齢化と新規参入者不足の解決策について

→ 新潟県でも同様の課題があり事例を紹介。

農家に狩猟免許を取得してもらう「半農半猟」の推進

若い人は土日のみわな設置、平日は高齢者が見回りを行う「集落ぐるみ捕獲」による分業体制を構築

猟友会員がいない集落には地域おこし協力隊を活用して狩猟技術を習得させ、3 年後も定住できる生業づくりまで支援する総合的なアプローチを実践している



## <第2部 パネルディスカッション>



### (1) シカの被害の現状と対策について

#### ア 東山部での鹿の被害の状況（山辺地区を中心に）

長野県認定管理捕獲技術者 平林 洸 様

(ア) 山辺地区のシカの頭数は推定2,750頭/Km<sup>2</sup>

(イ) 駆除の現状としては、山辺地区で300～350頭だが、生息頭数に対して足りていない。現状は畑に被害を出す加害個体への対応で手いっぱい

(ウ) 鹿はなんでも食べため、様々な農作物に被害がある。防護柵の山側では自然破壊が進み、山が崩れ始めている場所がある。

(エ) 鹿はマダニを運ぶキャリアであり、鹿の獣道にはたくさんのマダニが生息しているため、注意が必要。



#### イ 長野県内での鹿への対策状況や優良対策事例の紹介

長野県松本地域振興局林務課長 丸山基久様

(ア) 日本鹿による松本地域の農林業被害額は侵入防止策対策を始めた平成23年頃から減少傾向だったが、近年は増加傾向にある。対策が不十分であったり、鹿防護柵の管理体制のゆるみといった原因が考えられる。

(イ) 松本地域での鹿捕獲数は塩尻の高ボッチ高原での捕獲数が一番多いが、里山辺地区での捕獲数 R6 年度は383頭と2番目に多い結果となっている。



- (ウ) 野菜や果樹、森林の若芽や皮剥ぎなど、被害は多数報告されている。
- (エ) 対策としては、①捕獲 ②防除 ③生息環境整備の3本柱で取り組んでいる。
- (オ) 事例紹介として、中山地区の集落等捕獲実施隊、安曇野市の緩衝帯整備の取り組みを紹介

#### ウ 松本市のシカ被害に対する考え方について

松本市 長谷川産業振興部長

- (ア) 平成の初め頃、食害に強いと言われるわらびの栽培や、電気柵の試験的設置など、地元の皆さんとともに鳥獣被害の対策を行ってきた。
- (イ) 平成19年の国の法律制定から市も様々な鳥獣害への本格的対策が始まったと感じている。
- (ウ) 市は被害対策として、①個体群管理、②侵入防止対策、③生息環境管理3本柱を総合的に行っていくのが重要と認識して取り組んでいる。
- (エ) 対策を行う上で①地域全体で取り組む、②あきらめない 2点を大事に考えてきた。
- (オ) これまで、地域に出向いて対策の必要性の学習会、ワークショップを開催し機運を高める活動を行ってきた。
- (カ) 住民との協同事業で防除対策→短期間で長大な鹿防護柵を整備ができた。(資材：市、設置：地元住民)
- (キ) こうした活動が地域コミュニティ絆を深め、その後の維持管理にも役立っていると感じている。直近の取り組みとして梓川地区でのサルの追い払い例の提示
- (ク) 鹿防護柵設置から10年以上経過する中で高齢化、世代交代の流れの中で、「地域ぐるみの取組み」、「あきらめない」改めて共有していきたい。市としてはそのために地域に出向いて話をしていきたい。
- (ケ) 松枯れ倒木の倒壊は想定していなかった事態。まずは現状確認を今年度中に確認し、住民の皆さんと一緒に対策を考えていきたい。



#### エ 今後の課題

上記で発言いただいたパネリストから意見を伺いました。

- (ア) 平林氏
  - ・ シカの鳥獣害は自然災害と考えている。防災と言われる「自助」「共助」「公助」を鳥獣害対策に応用できないかと考えている。
    - 自助 畑の草刈り、農作物の適切な処分、電気柵設置
    - 共助 猟友会の駆除、耕作放棄地の発生防止
    - 公助 大規模防護柵設置、補助金等
 これをバランスよく行っていく必要があると思う。
  - ・ 捕獲者の立場としては、捕獲した鹿の後始末の問題がある。個人での処理には限界があると感じている。負担を考えて捕獲数を押さえている人もいる。
  - ・ 捕殺後の後処理に関する住民の理解もいただきたい。

- (イ) 丸山氏：対策の３本柱が重要だと思う。また、捕獲対策も重要で各種講座などで後継者の育成の手伝いをしたい。森林整備という面でも力を入れていきたい。捕獲、森林整備等の果たす役割を県民の皆さんに伝えていきたい。
- 長谷川部長：侵入防止柵は最近十分な管理ができていないという声が聞こえてくる。どのように管理するかを考える中で、守るべき農地をどこまでとするか再検討が必要となるのではと考えている。市民の皆さんと考えていきたい。

## (2) 鹿防護柵の維持管理の方向性

### ア 東山部の現状（里山辺地区から）

里山辺地区町会連合会会長 成田満様から現状説明がありました。

- (ア) 里山辺地区では松枯れ倒木が既存の鹿防護柵を倒す事例が多数起こるようになった。
- (イ) 修復作業は地元住民が行っているが、大木撤去や更なる倒木などの危険性がある。
- (ウ) 高齢化により、既存の体制では柵の修復が困難になりつつある。
- (エ) 修復が遅れた場所から農業被害が発生しており、今後人的被害にもつながりかねない。
- (オ) 市の緩衝帯整備事業で倒木による柵倒壊の被害は減少傾向と思われるが、維持管理については更なる研究が必要
- (カ) 現状は山に接している住民は当事者だが、接していない住民の関心が低いのが課題



### イ 維持管理の事例紹介や意見、関心を持ってもらう方法など

長野県農業技術課 海内様（柵の維持管理の好事例を紹介）

- (ア) 柵の管理道をウォーキングコース、見晴台などを設置する。
- (イ) 壊れた場所をすぐに報告できる仕組み（柱に番号を付けるなど）
- (ウ) 竹藪を切り取って竹細工を作るなど、森林環境を利用したイベントを実施など、強制ではなく、地域の中で盛り上げていくのが大事と感じる。



### ウ 松本市 長谷川産業振興部長

- (ア) 町場の方に関心を持ってもらう方法として、自分の地域に防護柵がある事を情報提供していく機会を作っていくことが大事ではと考えている。

### エ 平林 様（山辺地区の防護柵の状況や対策、人材不足解消に向けた意見）

- (ア) 農作物被害があった場所にあるけもの道をたどっていくと防護柵が壊れている例が多く、倒木での倒壊以外に柵の下を別の獣が開けた場所を鹿が出入りしている例がみられる。

- (イ) 点検の頻度に町会ごとに違いがみられることや、防護柵の距離も長いため、柵設置当初想定した形での管理は難しくなっていると感じている。
- (ウ) 見回りについて役員以外の方の協力が取れればと思う。イベントと関連させて人を募ることも山辺地区では可能ではないかと感じている。
- (エ) 柵の壊れている場所の普段からの情報共有、早期の把握が大事と思う。

オ 成田 様（パネリストの発言を聞いた感想、意見）

- (ア) 時間軸を考えるのが良いと思った。
- (イ) 倒木の危険性が無くなることが第一、その後維持管理をしっかりしていく。
- (ウ) 住民に知ってもらうことも重要と感じた。対策連絡会議や地区内回覧などで情報共有していきたい。小規模での学習会などもよいのではと感じている。

カ 山本 様

- (ア) 集落柵は山側でない人のほうが恩恵のあるものだと思っているので、ぜひそうした加賀田からも協力を得ていくことができれば良いと思う。

### (3) 今後の対応

今後の対応について、各パネリスト及び山本様から意見をいただきました。

ア 海内 様

- (ア) 集落柵は城の外堀、生産者は内堀として電気柵を設置してほしい。
- (イ) 見回りの頻度について、ドローンの活用などを検討してほしい。
- (ウ) 皆で協力できる体制ができれば思う。

イ 丸山 様

- (ア) 森林税を生かして健全な姿で長期にわたり育てていく環境、有害獣との共生を考えていきたい。

ウ 長谷川部長

- (ア) 現状の山の状況に非常に衝撃を受けた。今後、現状をしっかり把握して対策を考えたい。

エ 平林 様

- (ア) 人材不足の厳しい状況の中でそれでもやっていかなければならないと感じているが、駆除専門の方を増やせないかと思っている。また、捕獲、柵の維持管理には地元住民の協力が不可欠と感じている。

オ 山本 様

- (ア) この地区にはシカがたいへん多いと感じた。増える分も取れてない。加害個体の駆除が精いっぱい。科学的データに基づく個体管理が必要と思う。指標を見ながら計画的に捕殺していく、県の予算や市で協力しながら行ってほしい。
- (イ) 死体処理が非常に大事。鹿で使える肉は全体の20%しかない。北海道江刺村の死体処理の例などあるので、行政として取り組む課題としてほしいと感じた。
- (ウ) 森林管理の支援を県に積極的にお願いした。
- (エ) 最大の課題は人手不足。町側の方も巻き込みながら人材確保していく、又は捕獲や修繕を公共事業にできないか考えてもらいたい。



(4) 質疑応答】

シカ罾にかかった熊の処分について、これまでは山に帰す必要があったが、現状を聞きたい。

→ 先月から緊急銃猟が可能となった。